

平成30年12月21日(金)



# 藤 棚

第361号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

## 金星の美しさ

校長 小川義男

寒さの季節となった。22日が冬至だそうだから、この日からは昼の長さが伸び始める。熱帯では味わえない季節の移り変わりを味わう事ができる。

私の寝室は二階にある。家全体が真南ではなく、やや東に向いて立っている。田舎のような地域だから、遠望が見事に利く。

私は、朝四時に起きるのだが、カーテンを開けて暫く見ていると、晴天の日には金星が先ず目の中に入ってくる。理科の知識が少ないので、担当の先生に教えて貰いたいと思うが、金星は、どうしてあんなに、大きく美しいのだろうか。明けの明星とか、ヴィーナスとか呼ばれるのももともとだと思う。

晴れた日には、少し慣れてくると、金星ほど大きくはないが、その次くらいに大きくて美しい星が、幾つか見えてくる。

しかし、都会に住む悲しさで、それ以上の星を見つけることは難しい。

白馬の山小屋に泊まったとき、部屋の天井が開いて、夜空を見る事ができるようになっていた。

「星が見えた」などと言うものではない。星のない空間を見つけることが難しいくらい、空全体が、一面の星なのだ。

小学校六年生の頃の八月、ある事情で、真夜中に、二時間ほど、馬車に揺られ続けたことがある。あたりに灯りなど全くない頃である。私は、籠一杯の銀の粉を、空一杯にぶちまけ、竹箒で掃いたようだった。

古代の人々は、1日の相当の時間を暗闇の中で過ごした。しかし、彼らは淋しくはなかっただろう。眠るまでのほとんどの時間を、星空を眺めていたのではないだろうか。

古代人が星座に詳しいのは、実生活にその観察が必要だっただけでなく、その圧倒的な美しさで、彼らを捉えて離さなかったのではないだろうか。

月も素晴らしい。しかし私の家には物干し台がないし、ベランダもないから、月を見る拠点がない。月見用の「簡易天文台」を作ろうかとも思うが、果たして、それを生かせるかどうか。

紛失してしまったのだが、私は土井晩翠の詩集の初版本を持っていた。神田で見かけたら、少し高くても求めたいと思う。

詩集の名前は、「天地有情」と言う。テンチウジョウと読む。著作権は尽きているだろうから、本学園出版部から出版しても良いと思う。

そのひとつを紹介しよう。記憶だから、若し間違っていたら教えて欲しい。

ちぎれちぎれに 雲迷う  
夕の空に 星ひとつ  
光は未だ 浅けれど  
思いふかしや 天の海

ああカルデアに 牧人（マキビト）の  
汝（ナレ）を見しより 四千年（シセンネン）  
光は永久（トワ）に 若うして  
世はかくまでに 老いしかな

瞬く光 露帯びて  
今 はた泣くか 人のため  
疲れ争い煩いに  
我が世の幸は遠ければ

文章の美しさとは、かなりな程度、韻律の美しさと共存しているように思う。明治文語文が滅び去った後に、我が国の文学そのものが衰微して行ったとは言えないだろうか。その時代背景の中で流行歌（艶歌）そのものも滅び去っていった。演歌などという新語も現れ、歌手が芝居まがいの身振り手振りで、歌だか演技だか分からない「演歌」を演ずるようになった。芸人としての控えめな自覚はなく、若しかすると教祖の気分になっているのかも知れない。「文句がお姉さんで、メロディーは妹だ」と言われた大作曲家、古賀政男先生が懐かしまれるが、「文句」の衰えと共に、流行歌も衰え、素敵な歌手そのものが現れなくなった。韻律詩の大切さを、考えて見なければならぬのではないか。

島崎藤村 サトウハチロー 高橋掬太郎 その他素敵な先輩達の韻律詩を、身近においてはどうだろうか。

## フランスの政情を悲しむ

若者にヨーロッパ、少なくとも英仏を味わわせたいと、強く考えていたが、どうも果たせないようである。特にフランスは、アフリカを植民地にしていた関係で、政情が落ち着かない。犯人の射殺が再発するようでは、ヨーロッパは、暫く断念せざるを得ない。

農業国だから、国家の基盤は安定しているのだが、今暫く、修学旅行は難しかりう。

ハワイも素晴らしいところだ。学ぶ要素も多いし、飯も旨い。ダイヤモンドヘッドは、金のある州にしては足元が悪いが、まあそれも我慢して、絶景を楽しもう。

高一も楽しみにして欲しい。中学生が高校に進んだ頃はどうか。早く世界が平和になって欲しいものである。